

資料 C-3

2022 年度八戸学院大学短期大学部「学修成果の把握」前期調査報告

2023 年 2 月 24 日

IR・EM 委員会

1. 概要

本学幼児保育学科の学生は保育士資格および幼稚園教諭二種免許状、介護福祉学科の学生は介護福祉士資格の取得を目指して入学する。学生の日頃の学習の成果は、定期試験やそれに基づく GPA、実習評価等によって測定され、また、学修成果を示すパフォーマンスもさまざまな機会に披露される。それとは別に、彼らの在学中の成長をより包括的な視点で把握するため、「学修成果の把握」調査を企画し 2020 年度より実施してきている。調査の目的は学生自身の成長実感を把握し、ディプロマポリシーを検証すること、また、結果を授業やカリキュラム等の教育活動の見直しに繋げることである。本調査報告には、2021 年度生の第 3 回までの調査、2022 年度生の第 1 回までの調査が示されている。

2. 方法

(1) 調査項目の作成

2020 年度に、各学科において学科長を中心としたプロジェクトチームを編成し、そこで学科のディプロマポリシーを基に評価の観点となる項目を作成した。評価のレベルは 4 段階（「入学時を想定した第 1 段階」から、「卒業時に達していることが望まし第 4 段階」まで）とし、各段階の評価基準を分かりやすい短文で表現するよう、それぞれの観点の主たる担当教員に依頼した。作成の過程で観点の見直しを行い、評価基準となる文言はチームのメンバーが最終的に推敲した。2021 年度に、両学科とも調査項目の改善に取り組み、その内容は各学科のページに記載している。

(2) 調査の実施

評価方法は自己評価とし、グーグルフォームを用いて 2022 年度前期の試験期間に全学生を対象に実施した。ここでは、2021 年度生については、第 1 回調査（2020 年度前期）から第 3 回調査（2021 年度前期）に行った計 3 回の縦断的な結果の比較から検討を行う。そして、2022 年度生（1 回目）までの結果を示す。これは縦断的な調査であるが、2 年間の学修期間をカバーしていないため、得られる知見も限定的なものとなる。

3. 幼児保育学科について

(1) 結果の概要

表1 幼児保育学科のディプロマポリシー

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">1. 健全で豊かな情操と、保育の基盤となる教養や総合的な判断力を身につけている。2. 保育の専門的知識と技術を有し、子どもの発達過程に応じて豊かな保育環境を構成することができる。3. 保育者としての責務を理解し、他の保育者や専門職者と協働して、子どもの最善の利益を追求することができる。 |
|---|

幼児保育学科のディプロマポリシーは表1の通りである。2021年度入学生及び2022年度入学生ともに評価の観点のうち、①～④がポリシーの1、⑤～⑯がポリシーの2、⑰から⑲がポリシーの3に対応している。評価の観点、各項目の評価基準、2021年度生の3回に渡る調査の結果を5～9ページに、2022年度生の第一回調査の結果を10～14ページに示す。

学生の在籍数は178名（1年生94名、2年生84名）であるが、スマートフォンのトラブル等で4名の学生が回答できず、また休学1名を除くと、回収率92.4%（回答者は1年生92名、2年生82名）、有効回答率92.4%であった。

(2) カイ二乗検定の結果

2021年度生の1年次後期（第2回調査）と2年次前期（第3回調査）の結果において有意差が認められたのは、次の5つの評価の観点（19項目中5項目26%）であった。

- | |
|---|
| ⑩障がい（ $\chi^2(3)=8.04, p=0.045$ ） ⑬ピアノ（ $\chi^2(3)=15.58, p=0.001$ ）
⑭美術（ $\chi^2(3)=8.42, p=0.038$ ） ⑯言葉・文学（ $\chi^2(3)=12.13, p=0.006$ ）
⑰保育者の責務（ $\chi^2(3)=9.99, p=0.018$ ） |
|---|

一方、1年次前期（第1回調査）と2年次前期（第3回調査）の結果において有意差が認められたのは、次の計11つの評価の観点（19項目中11項目58%）となった。

- | |
|---|
| ⑤保育（ $\chi^2(3)=12.53, p=0.005$ ） ⑥福祉・養護（ $\chi^2(3)=22.19, p=0.000$ ）
⑧教職の意義・教育の理論（ $\chi^2(3)=11.81, p=0.008$ ）
⑨子ども理解（ $\chi^2(3)=11.58, p=0.009$ ） ⑩障がい（ $\chi^2(3)=15.52, p=0.001$ ）
⑪教育実践（ $\chi^2(3)=22.08, p=0.001$ ） ⑬ピアノ（ $\chi^2(3)=39.20, p=0.000$ ）
⑭美術（ $\chi^2(3)=14.11, p=0.002$ ） ⑮健康・体育（ $\chi^2(3)=17.58, p=0.000$ ）
⑯言葉・文学（ $\chi^2(3)=23.31, p=0.000$ ） ⑰保育者の責務（ $\chi^2(3)=13.35, p=0.004$ ） |
|---|

(3) 2021 年度生のディプロマポリシーの検証

ディプロマポリシーの3に対応する3つの観点項目に関しては、「⑩子どもの最善の利益」において評価段階2「少し理解している」の割合の増加が見られ、「⑪保育者の責務」「⑫他者との協働」では評価段階3の割合が増加していることから、保育者としての職務内容・責任を理解し、他者との協働する力について、1年次よりも学生が成長実感を得ていることが読み取れる。

ディプロマポリシー2に対応する「⑤保育」から「⑯言葉・文学」においては、すべての観点項目において評価段階1「入学時を想定した段階」の割合は減少し、評価段階3など、より高い段階に推移し「卒業時に達していることが望ましい段階」へ進んでいることから、子どもの健やかな心身の成長を支える保育者の専門知識・技術の獲得の実感を学生が得ていることが分かる。

ディプロマポリシーの1に対応する「①学びへの態度」から「④判断力・課題解決力」の全ての観点項目において、評価段階1の割合の減少は共通している。「③学びの態度」「判断力・課題解決力」では、評価段階3の割合の増加、「②対人的情操」は、評価段階2の割合の増加へと推移している。一方、「①情操」は評価段階1、3及び4の減少し、評価段階2の割合の増加へと推移している。

とりわけ教養教育の難しさが顕著に現れているが、概ね学生は保育の基盤となる人間性や教養、総合的な判断力について、学生、自らの変化の認識があることを読み取ることができる。

以上、これらのことから、ディプロマポリシーの到達に向かう過程にあり、現時点において、学生自身の主観的評価から幼児保育学科の教育課程の妥当性および効果性を確認することができる。

(4) 教育活動の見直し

第1回調査（1年次前期）と第3回調査（2年次前期）の結果から、ほぼ全ての評価の観点項目が肯定的な評価へと推移しており、評価段階4の割合は増減ともに変動幅が小さいが、学修成果の順調な獲得が確認できる。

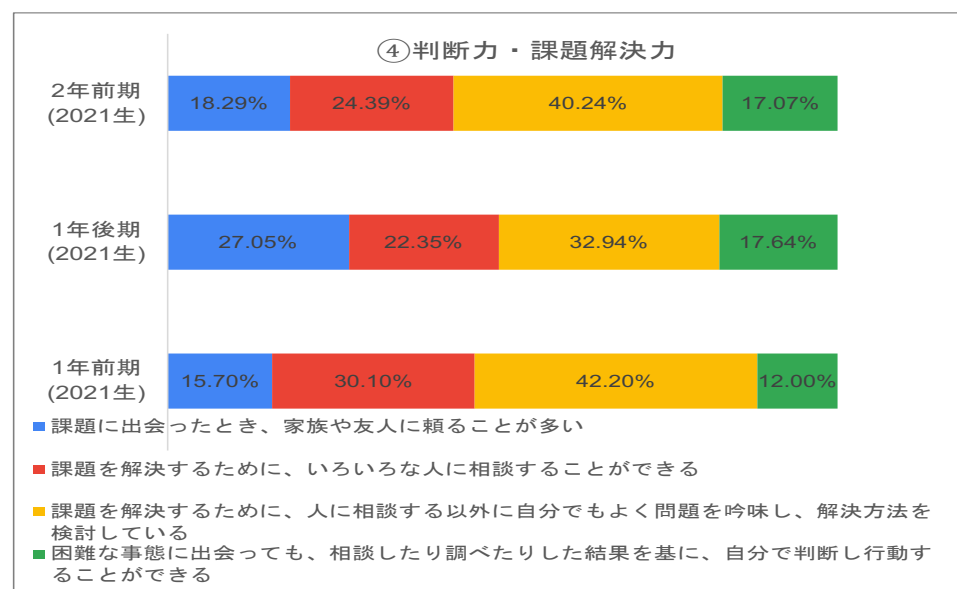
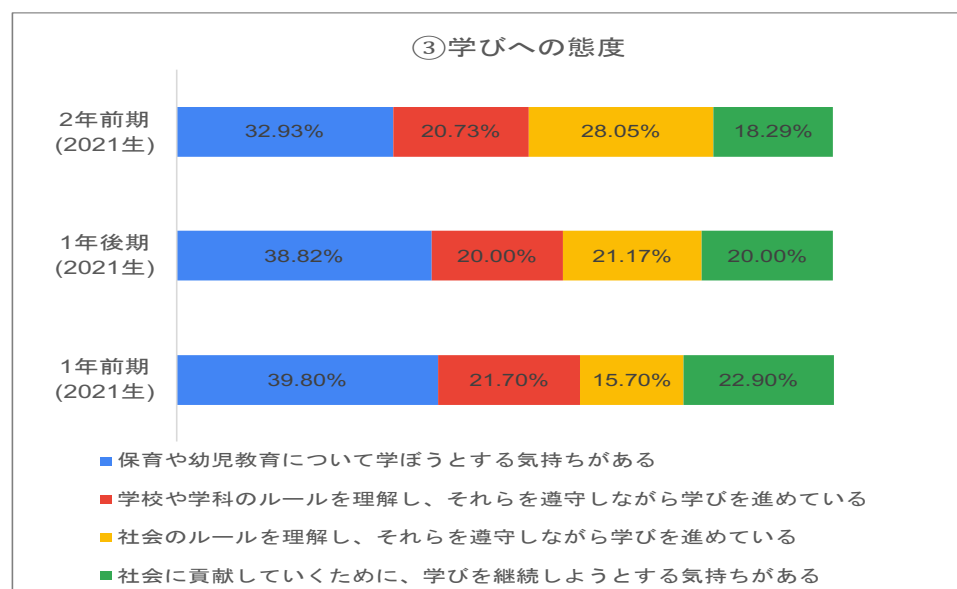
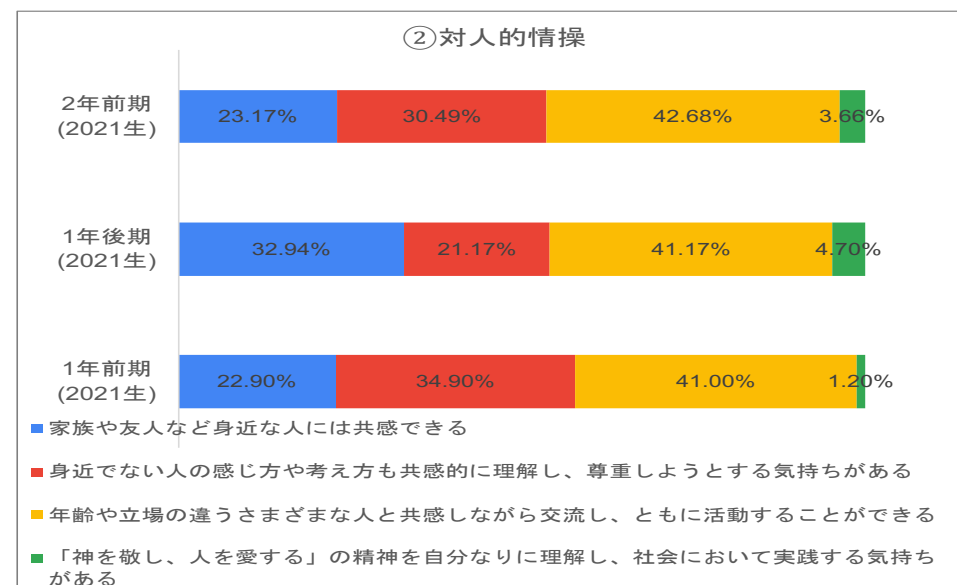
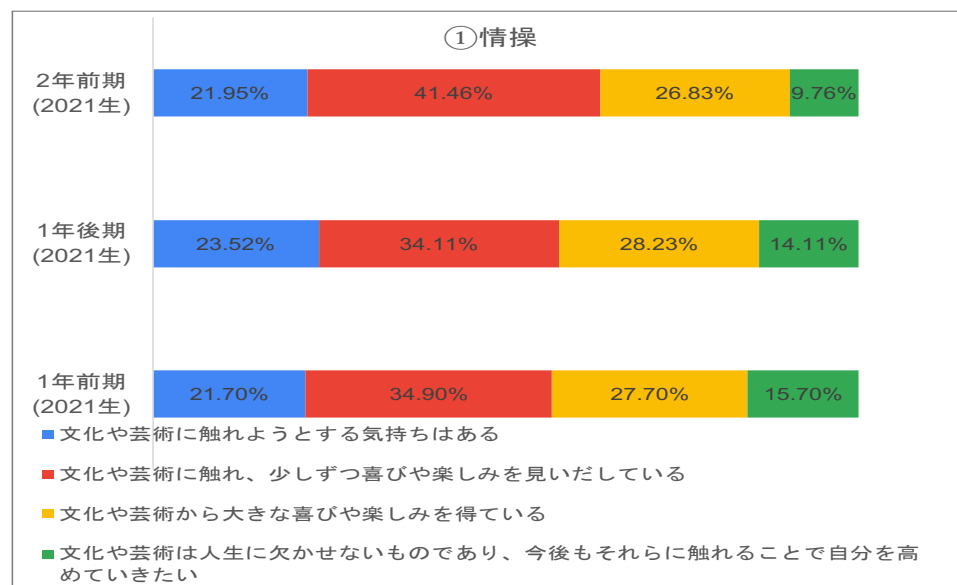
今回の結果から、本学のカリキュラムの中で、学生は自身の成長や変化の実感を得ながら、人としての育ち、専門的な知識・技術の学びから、自らの目標に向かう歩みを進めていることが分かる。第3回調査の後に、学生は最後の保育実習、教育実習の

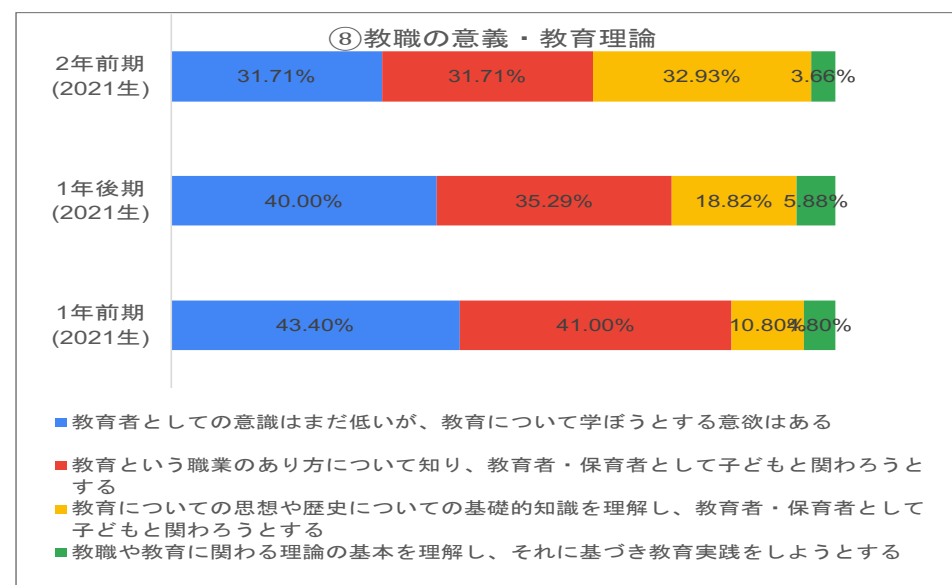
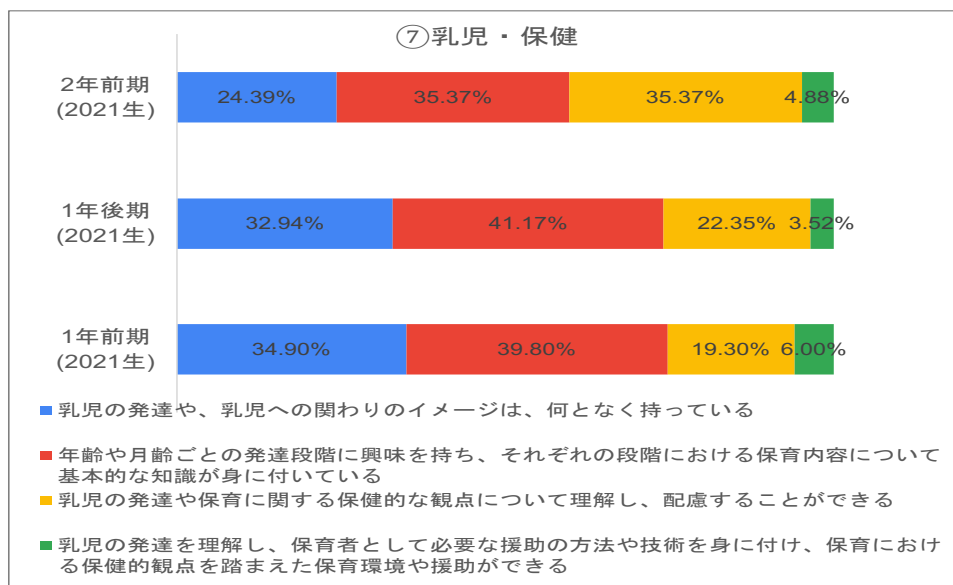
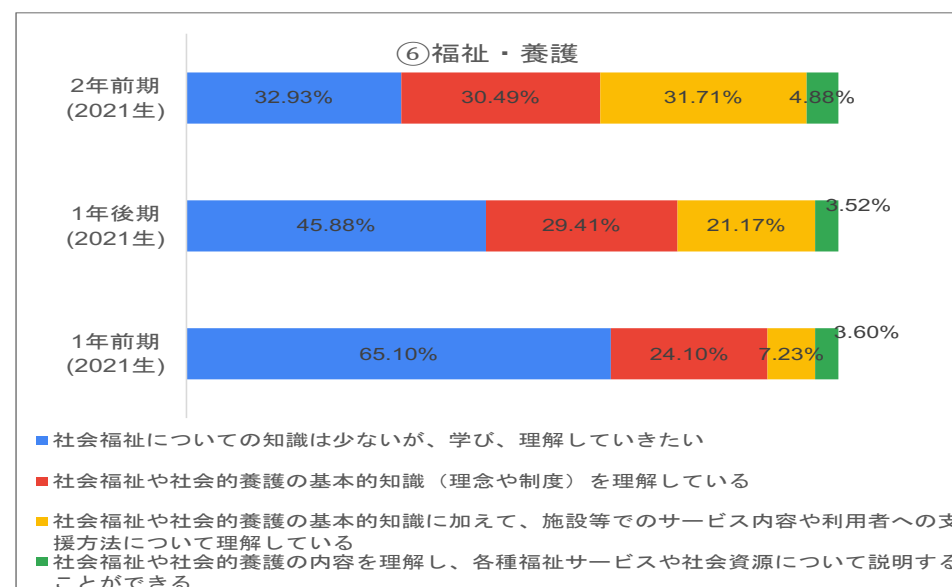
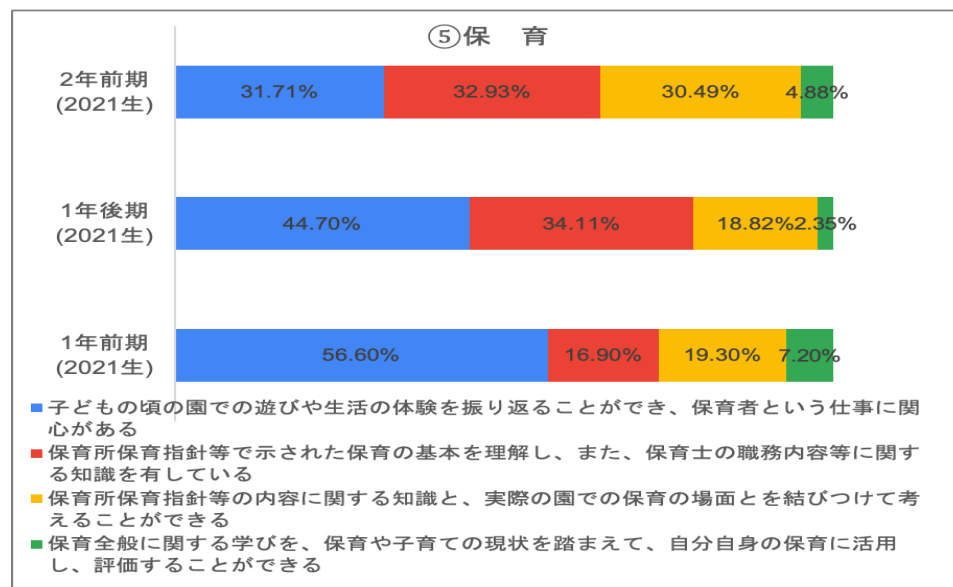
機会を控えている。保育現場の実際から体験的に学び、現場の先生方から貴重な指導を受ける中で、これまで獲得してきた専門的な知識や技術の成果を確認し、新たな学びを獲得し、新たな発見を得て、自らの課題への気付きを深めていくことになる。この実習が学生の貴重な学びの機会となるよう、実習担当者をはじめ、全ての教員が学生の強固な支えとなることが求められる。さらに、ディプロマポリシーにある人材の育成に向け、それらの実習終了後、学科としてより教育効果を高める教育活動を展開することが重要となる。

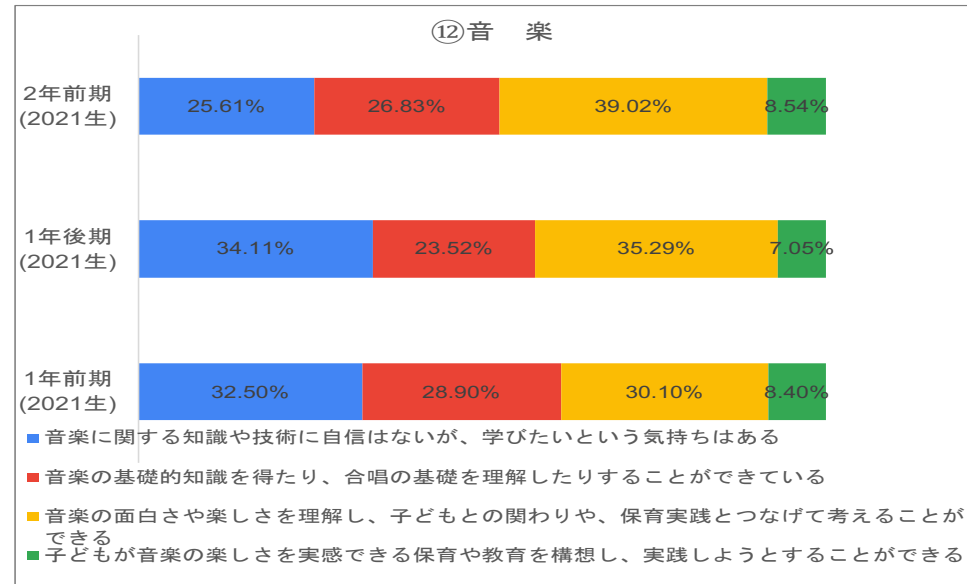
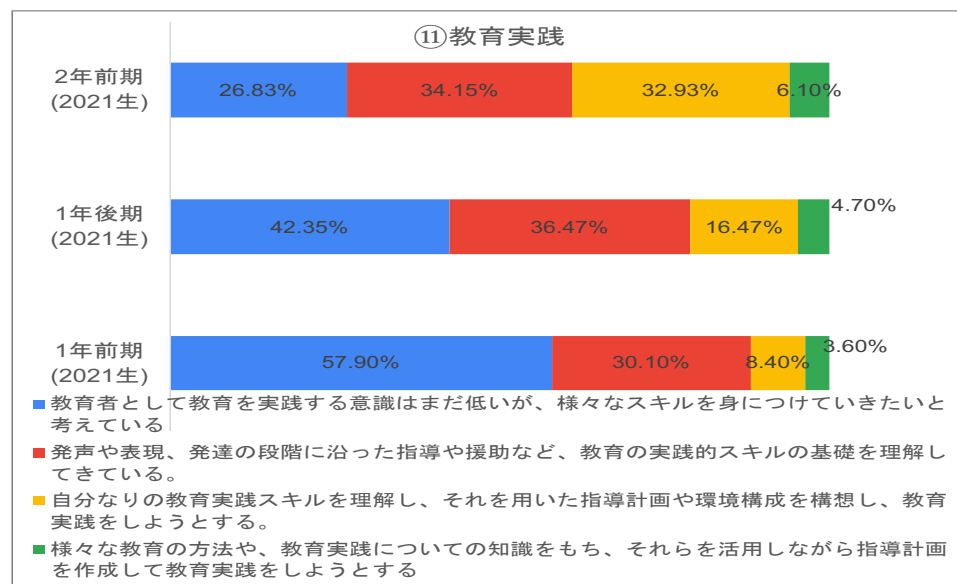
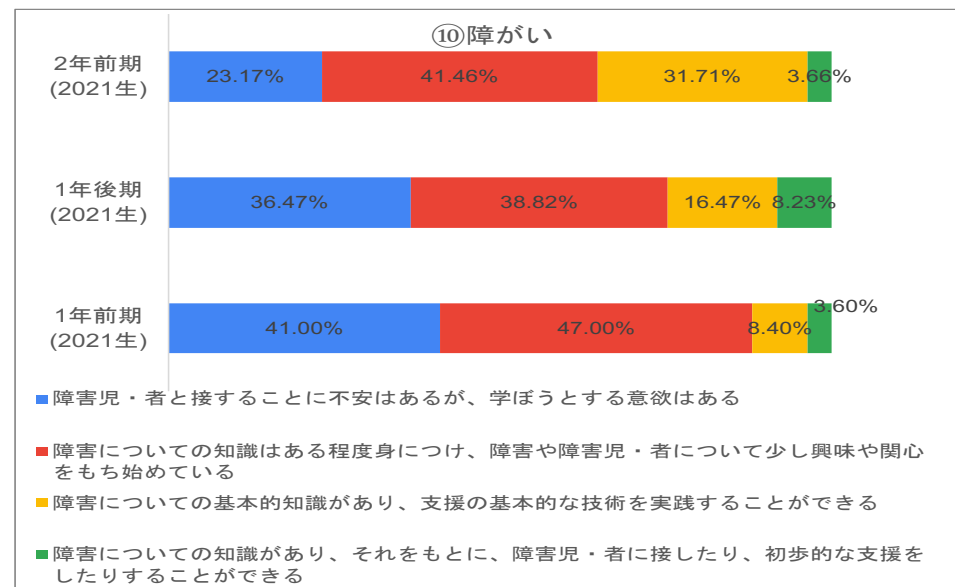
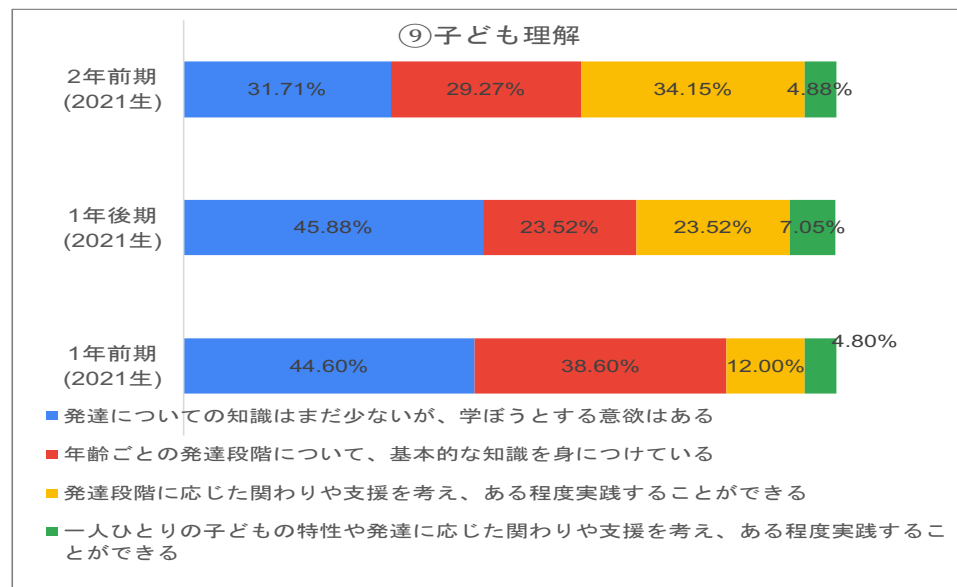
一方、ディプロマポリシーの1に対応する観点項目の評価段階の推移にやや停滞傾向が読み取れ、特に「①情操」にそれが表れている。これについては、教養科目が1年次に集中し、2年次には保育の専門科目が重点的に配置されていることが影響しているかも知れない。また、人間力とも言えるものを測定する難しさもあるため、評価段階の文言を再検討する必要もあろう。

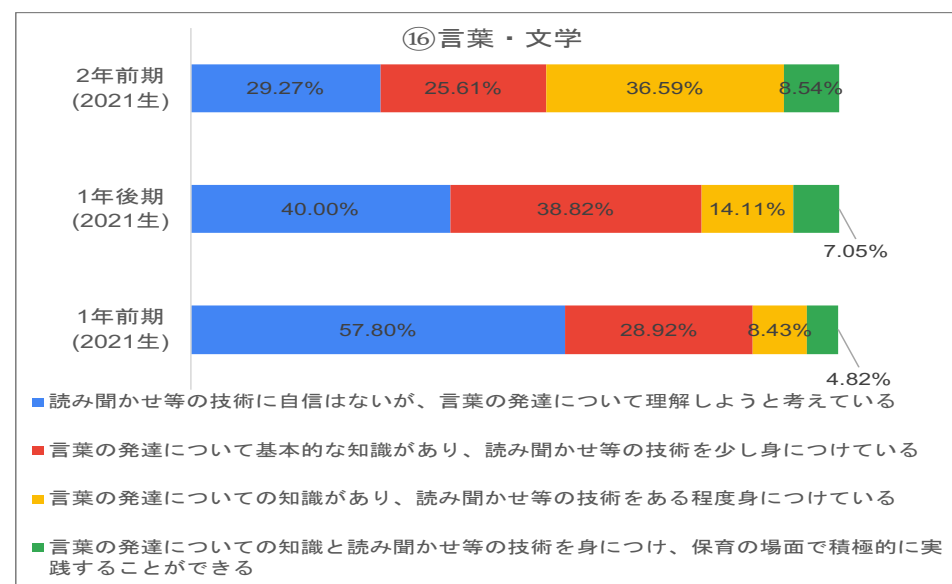
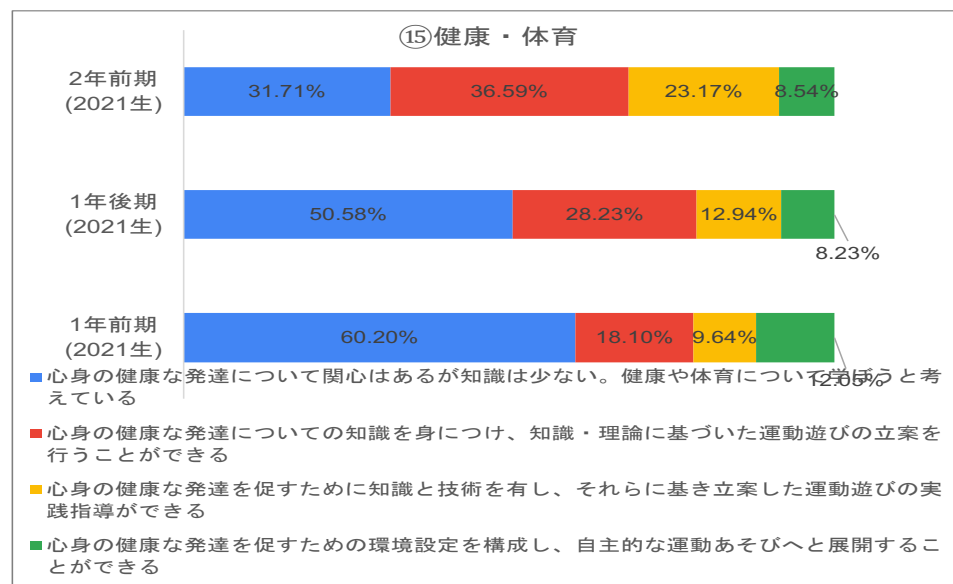
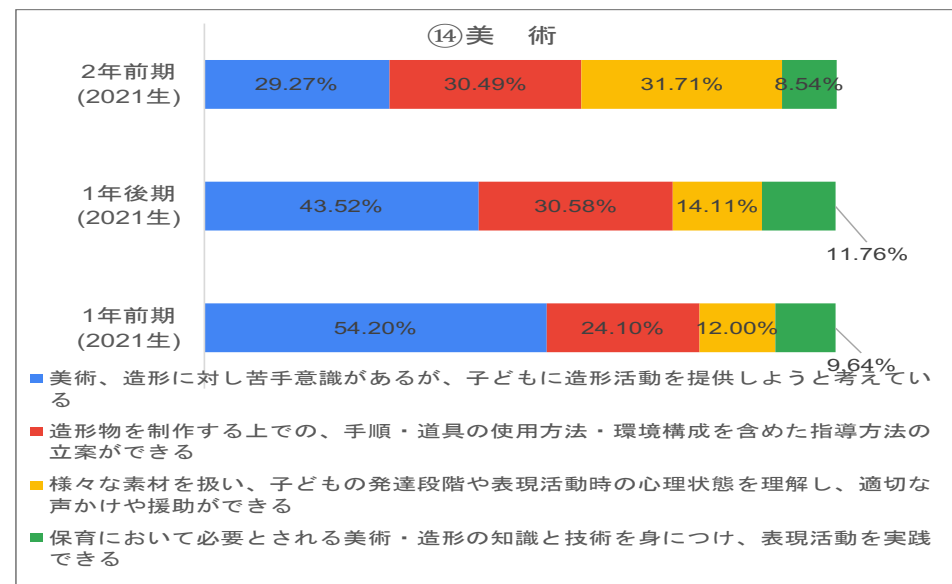
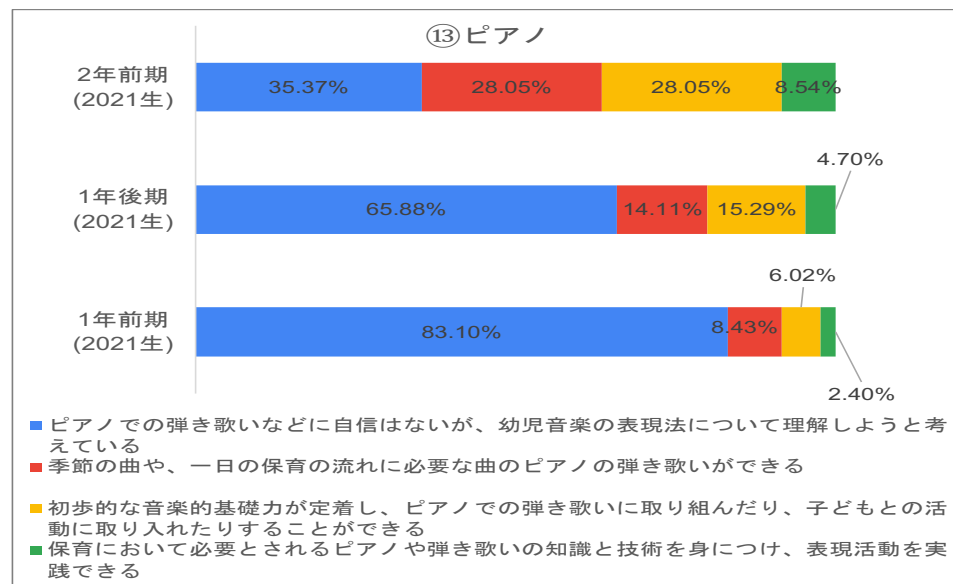
学科としての各教員が担当する授業運営においてアクティブ・ラーニングの手法を意識し、演習、グループでの事例検討や問題・課題解決の機会を設けるなどの工夫から、学修成果の獲得を図っており、今後も教員がディプロマポリシーを意識し、学科としてより取り組みを高めていくことが求められる。

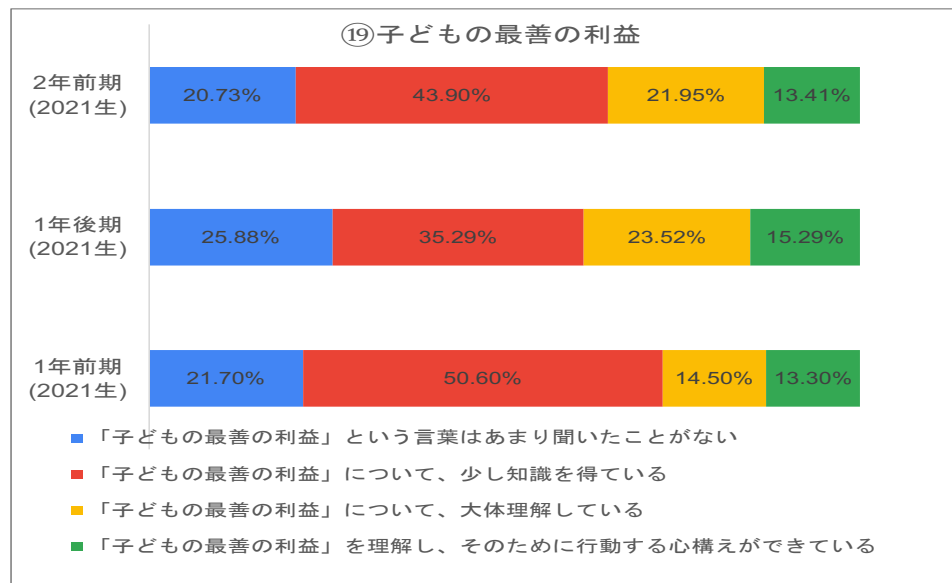
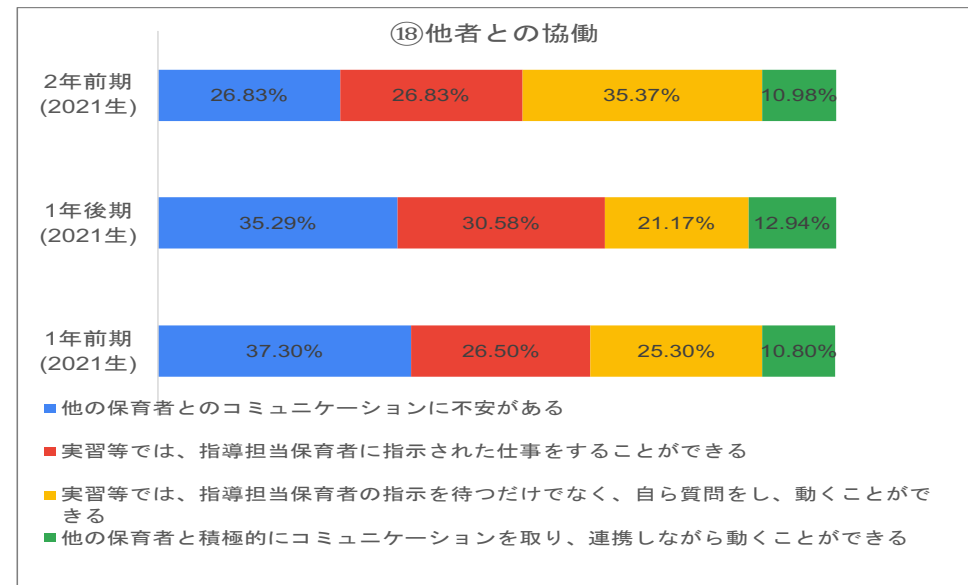
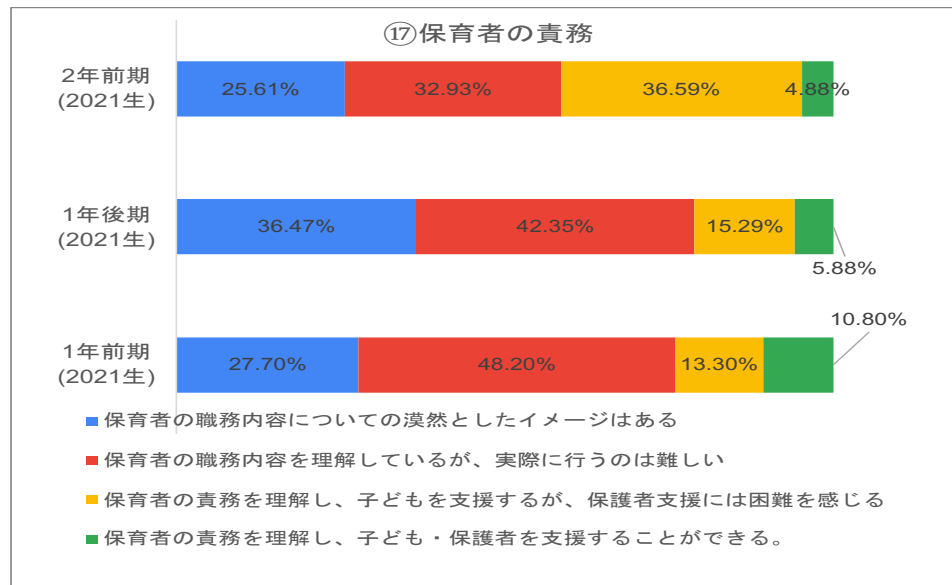
今後、学生の学修成果の主観的評価に加えて、成績評価などの客観的評価の指標も合わせた分析から、学科としての発展に向けて、教育活動の見直し、授業運営・内容の改善を続けていきたい。





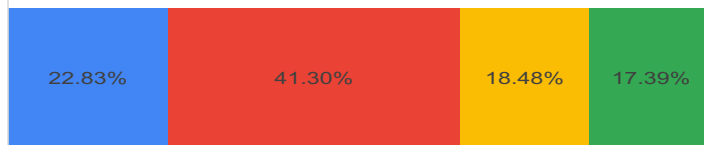






①情操

1年前期
(2022生)



- 文化や芸術に触れようとする気持ちはある
- 文化や芸術に触れ、少しずつ喜びや楽しみを見いだしている
- 文化や芸術から大きな喜びや楽しみを得ている
- 文化や芸術は人生に欠かせないものであり、今後もそれらに触れることで自分を高めていきたい

②対人的情操

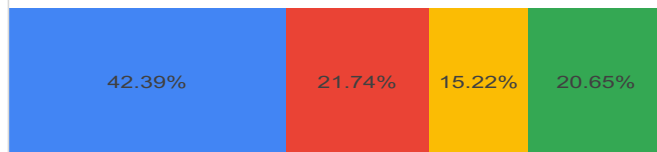
1年前期
(2022生)



- 家族や友人など身近な人には共感できる
- 身近でない人の感じ方や考え方も共感的に理解し、尊重しようとする気持ちがある
- 年齢や立場の違うさまざまな人と共感しながら交流し、ともに活動することができる
- 「神を敬し、人を愛する」の精神を自分なりに理解し、社会において実践する気持ちがある

③学びへの態度

1年前期
(2022生)



- 保育や幼児教育について学ぼうとする気持ちがある
- 学校や学科のルールを理解し、それらを遵守しながら学びを進めている
- 社会のルールを理解し、それらを遵守しながら学びを進めている
- 社会に貢献していくために、学びを継続しようとする気持ちがある

④判断力・課題解決力

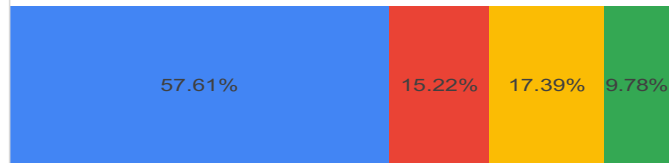
1年前期
(2022生)



- 課題に出会ったとき、家族や友人に頼ることが多い
- 課題を解決するために、いろいろな人に相談することができる
- 課題を解決するために、人に相談する以外に自分でもよく問題を吟味し、解決方法を検討している
- 困難な事態に出会っても、相談したり調べたりした結果を基に、自分で判断し行動することができる

⑤保 育

1年前期
(2022生)



- 子どもの頃の園での遊びや生活の体験を振り返ることができ、保育者という仕事に関心がある
- 保育所保育指針等で示された保育の基本を理解し、また、保育士の職務内容等に関する知識を有している
- 保育所保育指針等の内容に関する知識と、実際の園での保育の場面とを結びつけて考えることができる
- 保育全般に関する学びを、保育や子育ての現状を踏まえて、自分自身の保育に活用し、評価することができる

⑥福祉・養護

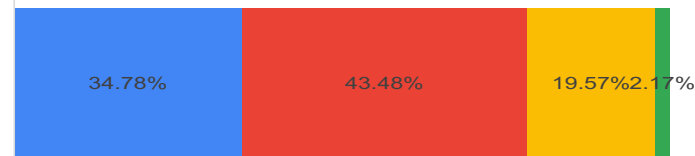
1年前期
(2022生)



- 社会福祉についての知識は少ないが、学び、理解していきたい
- 社会福祉や社会的養護の基本的知識（理念や制度）を理解している
- 社会福祉や社会的養護の基本的知識に加えて、施設等でのサービス内容や利用者への支援方法について理解している
- 社会福祉や社会的養護の内容を理解し、各種福祉サービスや社会資源について説明することができる

⑦乳児・保健

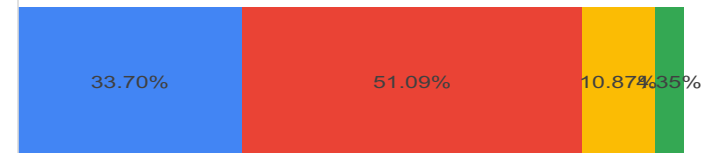
1年前期
(2022生)



- 乳児の発達や、乳児への関わりのイメージは、何となく持っている
- 年齢や月齢ごとの発達段階に興味を持ち、それぞれの段階における保育内容について基本的な知識が身に付いている
- 乳児の発達や保育に関する保健的な観点について理解し、配慮することができる
- 乳児の発達を理解し、保育者として必要な援助の方法や技術を身に付け、保育における保健的な観点を踏まえた保育環境や援助ができる

⑧教職の意義・教育理論

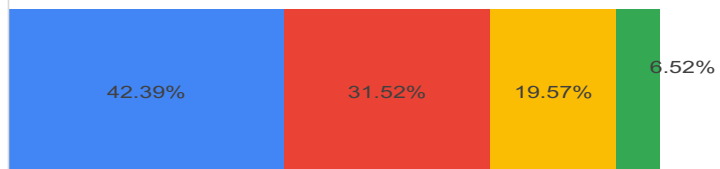
1年前期
(2022生)



- 教育者としての意識はまだ低い、教育について学ぼうとする意欲はある
- 教育という職業のあり方について知り、教育者・保育者として子どもと関わろうとする
- 教育についての思想や歴史についての基礎的知識を理解し、教育者・保育者として子どもと関わろうとする
- 教職や教育に関わる理論の基本を理解し、それに基づき教育実践をしようとする

⑨子ども理解

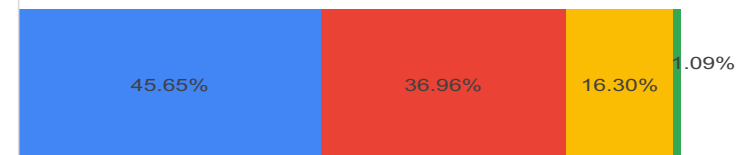
1年前期
(2022生)



- 発達についての知識はまだ少ないが、学ぼうとする意欲はある
- 年齢ごとの発達段階について、基本的な知識を身につけている
- 発達段階に応じた関わりや支援を考え、ある程度実践することができる
- 一人ひとりの子どもの特性や発達に応じた関わりや支援を考え、ある程度実践することができる

⑩障がい

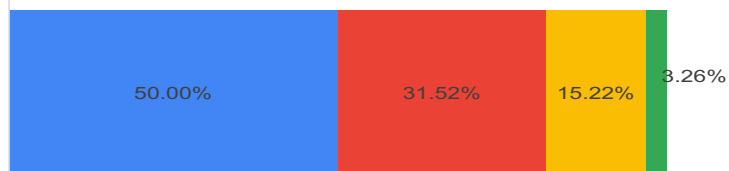
1年前期
(2022生)



- 障害児・者と接することに不安はあるが、学ぼうとする意欲はある
- 障害についての知識はある程度身につけ、障害や障害児・者について少し興味や関心をもち始めている
- 障害についての基本的知識があり、支援の基本的な技術を実践することができる
- 障害についての知識があり、それをもとに、障害児・者に接したり、初歩的な支援をしたりすることができる

⑪教育実践

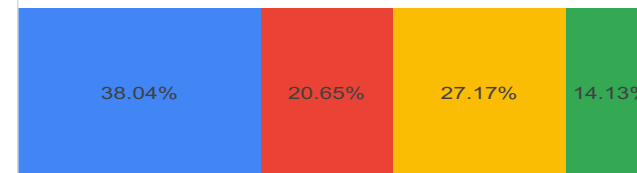
1年前期
(2022生)



- 教育者として教育を実践する意識はまだ低い、様々なスキルを身につけていきたいと考えている
- 発声や表現、発達の段階に沿った指導や援助など、教育の実践的スキルの基礎を理解してきている
- 自分なりの教育実践スキルを理解し、それを用いた指導計画や環境構成を構想し、教育実践をしようとする
- 様々な教育の方法や、教育実践についての知識をもち、それらを活用しながら指導計画を作成して教育実践をしようとする

⑫音楽

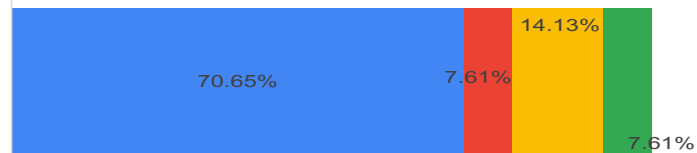
1年前期(2022生)



- 音楽に関する知識や技術に自信はないが、学びたいという気持ちはある
- 音楽の基礎的知識を得たり、合唱の基礎を理解したりすることができている
- 音楽の面白さや楽しさを理解し、子どもとの関わりや、保育実践とつなげて考えることができる
- 子どもが音楽の楽しさを実感できる保育や教育を構想し、実践しようとすることができる

⑬ ピアノ

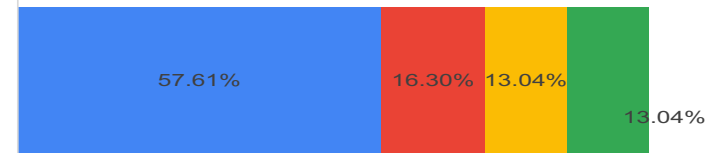
1年前期
(2022生)



- ピアノでの弾き歌いなどに自信はないが、幼児音楽の表現法について理解しようと考えている
- 季節の曲や、一日の保育の流れに必要な曲のピアノの弾き歌いができる
- 初歩的な音楽的基礎力が定着し、ピアノでの弾き歌いに取り組んだり、子どもとの活動に取り入れたりすることができる
- 保育において必要とされるピアノや弾き歌いの知識と技術を身につけ、表現活動を実践できる

⑭ 美術

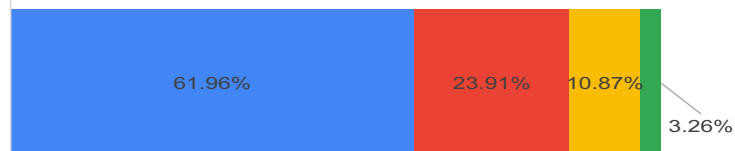
1年前期
(2022生)



- 美術、造形に対し苦手意識があるが、子どもに造形活動を提供しようと考えている
- 造形物を制作する上での、手順・道具の使用方法・環境構成を含めた指導方法の立案ができる
- 様々な素材を扱い、子どもの発達段階や表現活動時の心理状態を理解し、適切な声かけや援助ができる
- 保育において必要とされる美術・造形の知識と技術を身につけ、表現活動を実践できる

⑮ 健康・体育

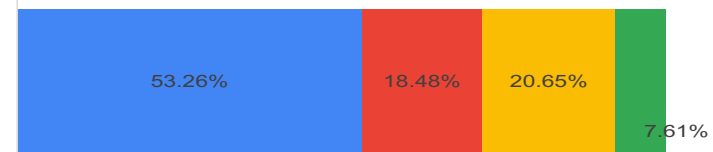
1年前期
(2022生)



- 心身の健康な発達について関心はあるが知識は少ない。健康や体育について学ぼうと考えている
- 心身の健康な発達についての知識を身につけ、知識・理論に基づいた運動遊びの立案を行うことができる
- 心身の健康な発達を促すために知識と技術を有し、それらに基き立案した運動遊びの実践指導ができる
- 心身の健康な発達を促すための環境設定を構成し、自主的な運動あそびへと展開することができる

⑯ 言葉・文学

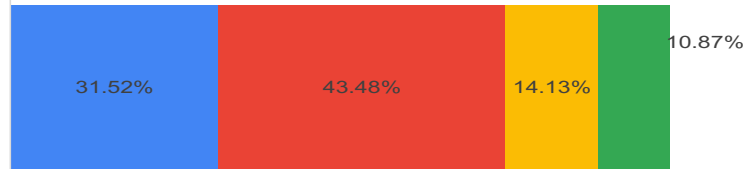
1年前期
(2022生)



- 読み聞かせ等の技術に自信はないが、言葉の発達について理解しようと考えている
- 言葉の発達について基本的な知識があり、読み聞かせ等の技術を少し身につけている
- 言葉の発達についての知識があり、読み聞かせ等の技術をある程度身につけている
- 言葉の発達についての知識と読み聞かせ等の技術を身につけ、保育の場面で積極的に実践することができる

⑰保育者の責務

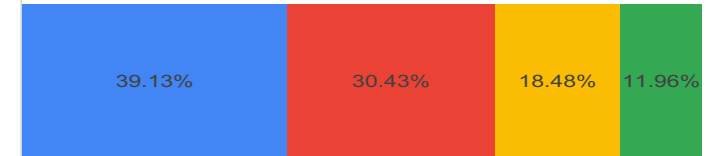
1年前期
(2022生)



- 保育者の職務内容についての漠然としたイメージはある
- 保育者の職務内容を理解しているが、実際に行うのは難しい
- 保育者の責務を理解し、子どもを支援するが、保護者支援には困難を感じる
- 保育者の責務を理解し、子ども・保護者を支援することができる。

⑱他者との協働

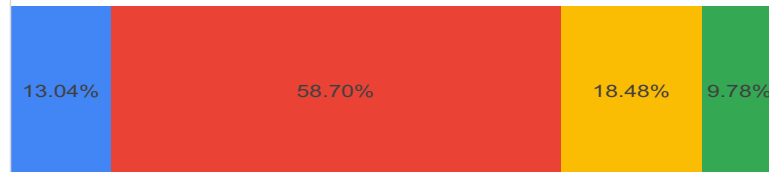
1年前期
(2022生)



- 他の保育者とのコミュニケーションに不安がある
- 実習等では、指導担当保育者に指示された仕事を行うことができる
- 実習等では、指導担当保育者の指示を待つだけでなく、自ら質問をし、動くことができる
- 他の保育者と積極的にコミュニケーションを取り、連携しながら動くことができる

⑲子どもの最善の利益

1年前期
(2022生)



- 「子どもの最善の利益」という言葉はあまり聞いたことがない
- 「子どもの最善の利益」について、少し知識を得ている
- 「子どもの最善の利益」について、大体理解している
- 「子どもの最善の利益」を理解し、そのために行動する心構えができています

4. 介護福祉学科について

(1)結果の概要

介護福祉学科のディプロマポリシーは表1の通りである。

表1 介護福祉学科のディプロマポリシー

介護実践の基盤となる教養と総合的な判断力および豊かな人間性を身につけている。 1.あらゆる場面に汎用できる介護の知識と技術を有し、自立支援の観点から、身体的な支援だけではなく、心理的・社会的支援を展開できる能力を身につけている。 2.利用者や家族の援助のためのコミュニケーション能力、的確な記録・記述ができる能力及び介護過程を多職種協働チームにより展開できる能力を身につけている。 3.介護ニーズの複雑化・多様化・高度化に対応し、利用者や家族等のエンパワメントを重視した支援ができる。 4.生活の質の維持・向上の視点を持って、利用者の状態の変化に対応できる。

2021 年度入学生の評価の観点のうち、①がポリシーの「豊かな人間性」に対応し、②～⑯がポリシー 2～4 に対応している。評価の観点、各項目の評価基準、2021 年度生の 2 回に渡る調査の結果を 17～20 ページに、2021 年度生は 21～24 ページに示す。学生の在籍数は 21 名（1 年生 21 名、2 年生 13 名）であるが、休学等で 3 名の学生が回答できず、休学者を除く回収率は 92.4%（回答者は 1 年生 19 名、2 年生 12 名）、有効回答率 92.4%であった。

(2) フィッシャー検定の結果

1) 2021 年度生の結果

2021 年度生の 1 年次後期（第 2 回調査）と 2 年次前期（第 3 回調査）の結果において有意差が認められたのは、次の 2 つの評価の観点であった。

③権利擁護（ $p=0.0343$ ）、⑨医療的ケア（ $p=0.0136$ ）

一方、1 年次前期（第 1 回調査）と 2 年次前期（第 3 回調査）の結果において有意差が認められたのは、次の 5 つの評価の観点であった。

③ 権利擁護（ $p=0.0343$ ）、⑥ 社会のしくみと法制度（ $p=0.0447$ ）、
⑧-3 生活支援技術(排泄)（ $p=0.0061$ ）、⑧-4 生活支援技術(清潔と入浴)（ $p=0.0498$ ）、
⑨医療的ケア（ $p=0.0447$ ）

(3) 2021 年度生のディプロマポリシーの検証

ディプロマポリシーに対応する観点項目に関しては、「①豊かな人間性」において評

評価段階 1 と 2 の割合の増加が見られ、そのぶん評価項目 3 が減少した。この観点のみでは低下したと見てとれるが、「②人間の尊厳と自立」「③権利擁護」の評価段階 3 と 4 の増加が見られることから、1 年次よりも学生が人間の尊厳の学びを深め“全人的な理解”を深めつつ、その支援の困難さを理解したことが読み取れる。これらのことから、ディプロマポリシーの到達に向かう過程にあり、現時点において、学生自身の主観的評価から介護福祉学科の教育課程の妥当性および効果性を確認することができる。

(4) 教育活動の見直し

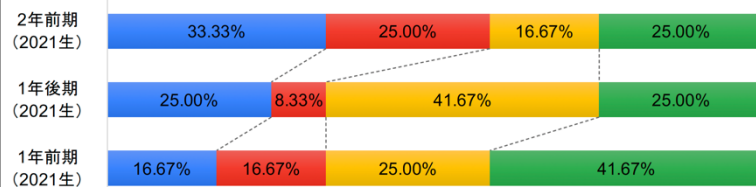
第 1 回調査（1 年次前期）と第 3 回調査（2 年次前期）の結果から、大半の評価の観点項目が評価段階 4 もしくは 3 の割合が増加している。その中で、生活支援技術や医療的ケアなどの実技科目に関する観点項目では特に評価段階 4 もしくは 3 の割合が増加していることから、実習などでの実践を経験し、自己の技量や資質を高めている段階であることが窺える。

今回の結果から、本学のカリキュラムでの専門的な知識・技術の学びのあり方を考えるにあたり、実習と実習後の教育を考える意義は大きいと思われる。それは、第 3 回調査の後には、学生は最後の介護実習を控えていることから窺えるものである。前述の幼児保育学科と同様に、介護学科でも介護現場の実際から体験的に学び、現場の職員からの指導を受けるにあたり、これまで獲得してきた専門的な知識や技術を確認する機会となり、新たな学びを獲得し、新たな発見を得て、自らの課題への気付きを深めていくことになる。この実習が学生の貴重な学びの機会となるよう、実習での学びを持ち帰り、多面的な視点から振り返ることが知識・技術を高め、さらには介護の専門職としての資質や人間性を高めることにつながるものと思われる。

ディプロマポリシーに掲げる“豊かな人間性”は知識と技術の積み重ねだけで醸成されることはなく、実践の中での利用者や職員とのふれあいのなかで得られた気づきに向き合うことが重要と思われる。しかし、短い実習期間で人間的な深みのある学びを完遂させることは難しく、実習を終了したからこそ振り返れる学びがあろうかと考えられる。そのため、学科の教員が、学生がすべての実習を終えられたことを喜びつつ、演習などの機会の中で、実習の成果や新たに見えた自己の課題のほか、学生の人間的な価値観の変化などを捉えて、助言や指導をすることが望ましいと思われる。

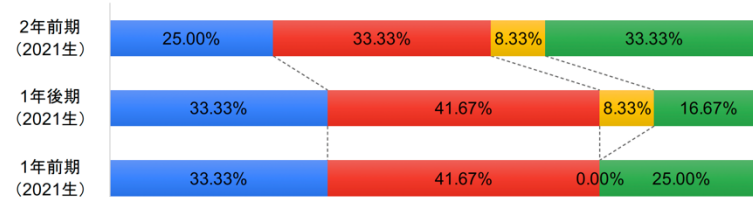
今後は、最終となる第 4 回（2 年次後期）の結果から、これまでの 2 年間の教育活動のあり方を振り返り、授業運営・内容の改善の示唆を得たい。

① 豊かな人間性



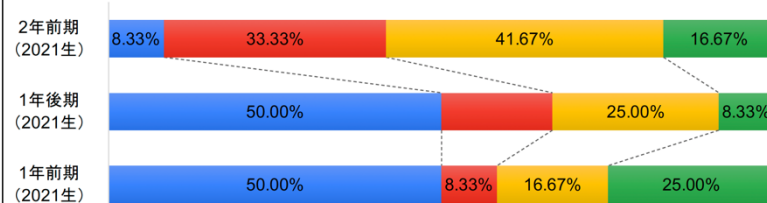
- 1 支援を必要とする人に対して、その気持ちに共感することができる
- 2 支援が必要な人を多角的な視点で捉え、全人的に理解することができる
- 3 支援が必要な人に対して、進んで支援しようとする
- 4 支援が必要な人のその人らしい生活を捉えた支援して、学んだ知識と技術を活用することができる

② 人間の尊厳と自立



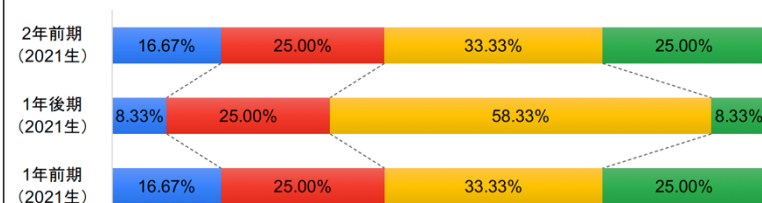
- 1 尊厳や自立の意味を理解している。
- 2 尊厳を保持し自立を支援するという介護福祉の基本理念を理解している。
- 3 自立の意味と自己決定のプロセスを理解し、実習において活用できる。
- 4 対象者の尊厳を保持しながら、自立を目指した支援ができる。

③ 権利擁護



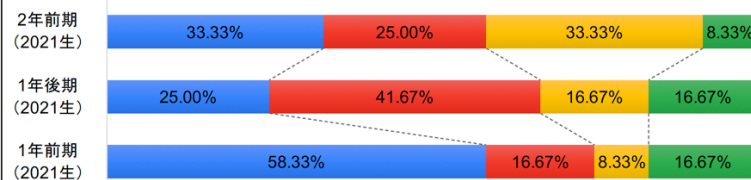
- 1 人権思想・福祉理念の変遷を理解し、権利擁護の視点を理解している。
- 2 権利擁護のための社会制度を理解している。
- 3 専門職としての倫理感や専門職者として役割を理解している。
- 4 権利擁護の視点を保ちながら、対象者の支援ができる。

④ 多様な生活者の理解



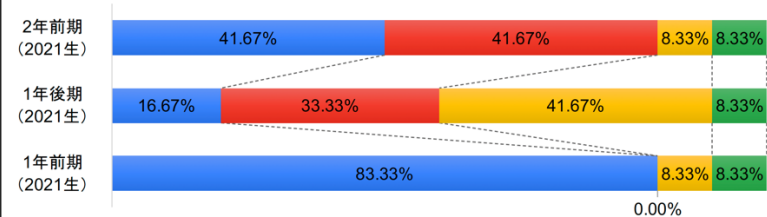
- 1 自己概念やこころのしくみを理解している。
- 2 こころからだのしくみを理解している。
- 3 介護を必要とする人の生活の個性、多様性、社会とのかかわりを理解することができる。
- 4 生活者を、その人の在り方を受け入れながら、身体的・心理的・社会的に理解し支援に結びつけることができる。

⑤ 生活者を取り巻く環境



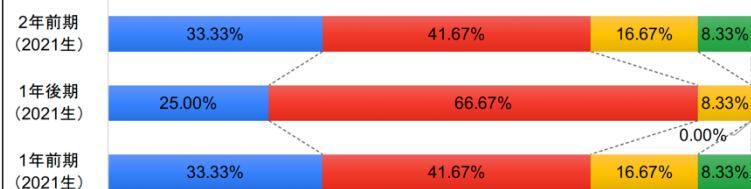
- 1 生活と社会のかかわりにおける、自助・互助・共助・公助について理解している。
- 2 支援が必要な人の生活の場や家族形態・社会との関わりなどそれまでの暮らしについて理解することができる
- 3 地域にある在宅・施設など生活の場の多様性を理解し利用者と結びつけることができる。
- 4 生活者をとりまく環境を把握し、その人に適した資源と結びつけ支援につなげることができる。

⑥ 社会のしくみと法制度



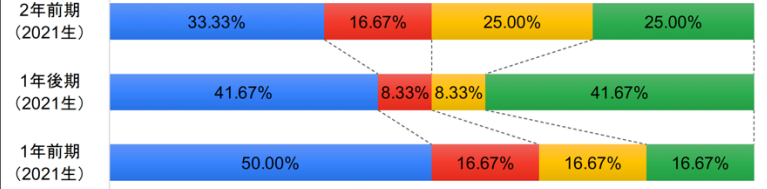
- 1 社会保障制度の基本的な考え方としくみや内容について理解している。
- 2 高齢者福祉制度・介護保険制度・障害者福祉制度・権利擁護や個人情報保護などの基本的な考え方、各制度のしくみや内容について理解している。
- 3 地域共生社会や地域包括ケアシステムの基本的な考え方及び地域包括ケアにおける介護福祉士の役割について理解している。
- 4 制度やサービスなどの社会資源を活用し、対象者を支援できる。

⑦ 認知症の理解



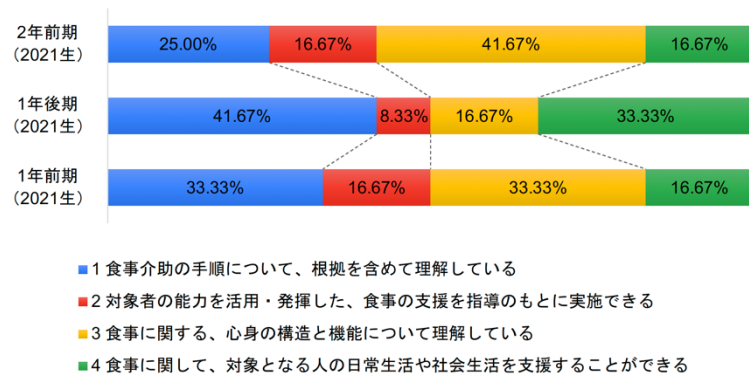
- 1 認知症の人の心理や身体機能に関する基本的な知識を理解している。
- 2 認知症のある人や障害のある人の家族に生じやすい課題を把握することができる。
- 3 対象者の持てる力を把握し、自立支援のための環境整備の方法を検討することができる。
- 4 援助が必要な人やその家族の自立支援に向けた支援ができる。

⑧-1 生活支援技術(移動)

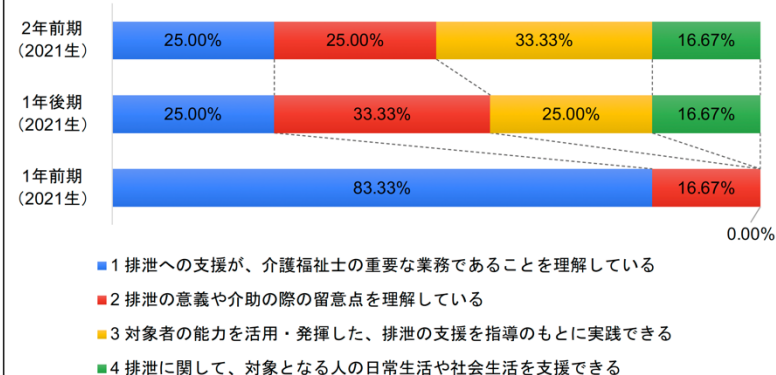


- 1 移動の意義や介助の際の留意点を理解している
- 2 対象者の能力を活用・発揮した、移動支援を指導のもとに実践できる
- 3 移動に関する、心身の構造と機能について理解している
- 4 移動支援に関して、対象となる人の日常生活や社会生活を支援することができる

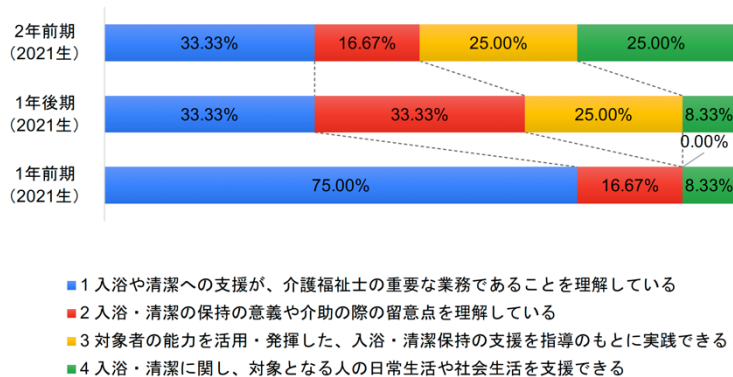
⑧-2 生活支援技術(食事)



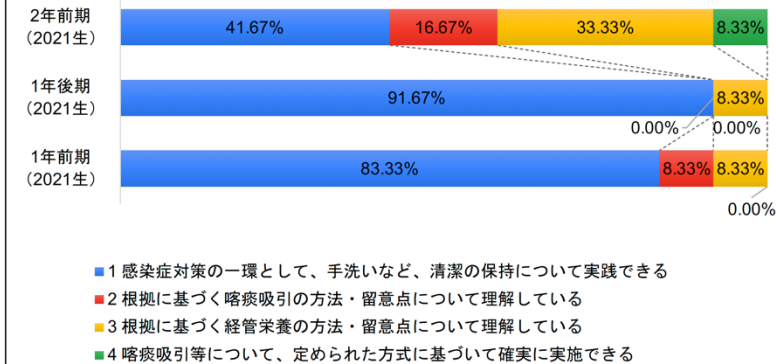
⑧-3 生活支援技術(排泄)



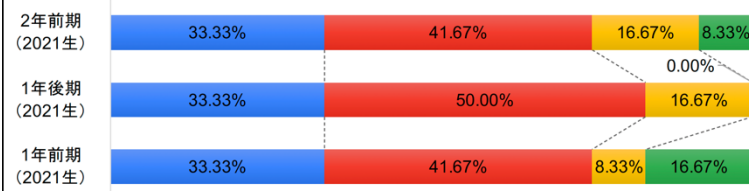
⑧-4 生活支援技術(清潔と入浴)



⑨ 医療的ケア

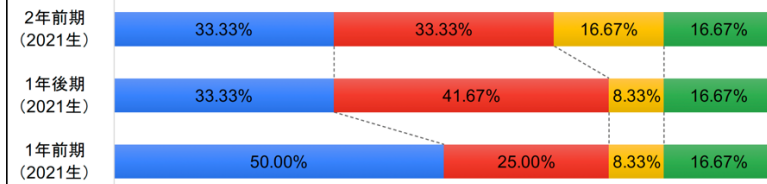


⑩ 発達と老化の理解



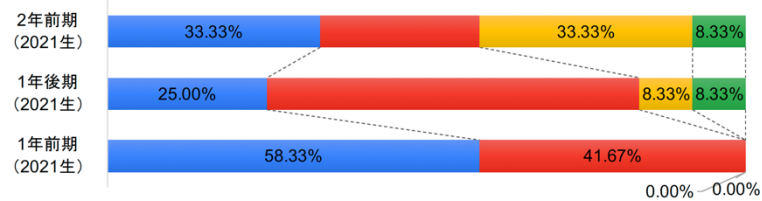
- 1 老化に伴う身体的・心理的・社会的な変化について理解している。
- 2 障害による心身への影響や心理的な変化について理解している。
- 3 障害や慢性疾患や難病のある人の状態像や生活状況を踏まえ、本人主体の支援やQOLを高める支援を指導のもとに実践できる。
- 4 障害や認知症、慢性疾患などのある人を支援できる。

⑪ コミュニケーション



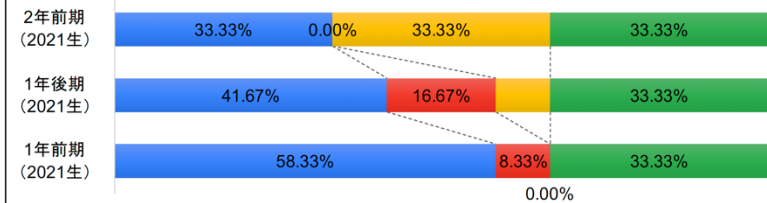
- 1 心理学的支援を踏まえたコミュニケーションの意義や機能を理解している。
- 2 本人の意思決定を支援するために必要なコミュニケーション技術を活用できる。
- 3 障害の特性に応じたコミュニケーションの方法を適用し、実践できる。
- 4 意思表示や意思決定を促す支援ができる

⑫ 介護過程の展開



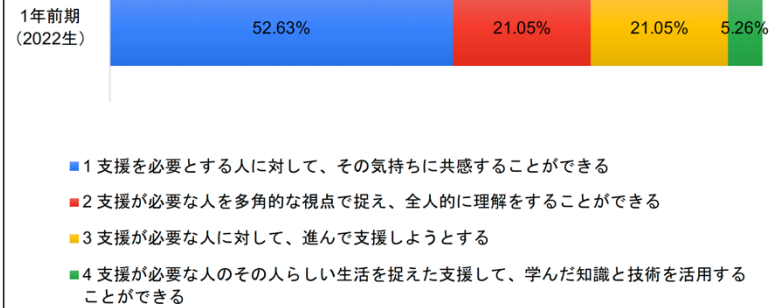
- 1 介護実践における介護プロセスの重要性が理解できる
- 2 ICFシートを活用して情報(観察・確認)の整理をし、生活課題を抽出できる
- 3 介護過程を踏まえ、根拠に基づいた介護計画を立案できる。
- 4 多職種と協働しながら介護過程を展開できる

⑬ チームケア

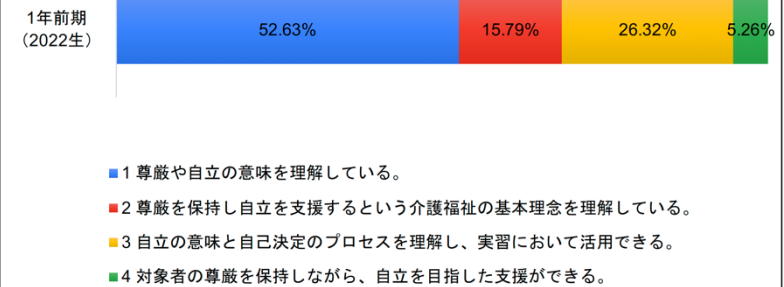


- 1 チームで働くために必要なリーダー、フォロワーの役割を理解している。
- 2 チームで支援することの意義や方法が説明できる。
- 3 支援が必要な人の生活を地域で支えるためのサポート体制や、多職種連携・協働による支援の基礎的な知識を理解している。
- 4 チームの一員としての役割を自覚し、協働することができる。

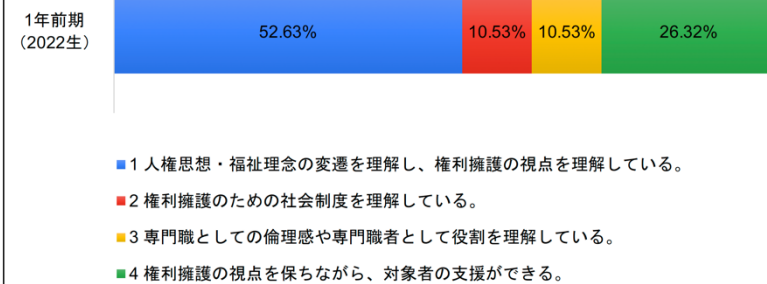
① 豊かな人間性



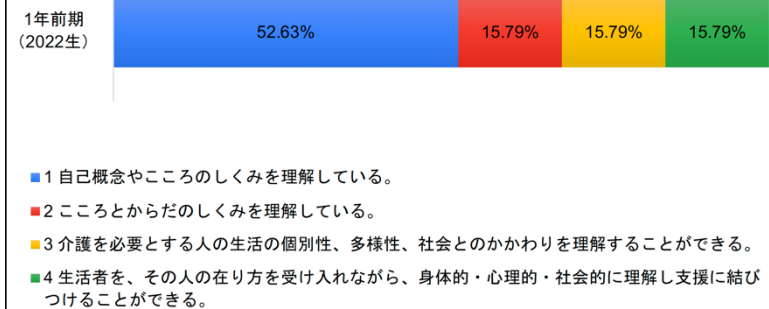
② 人間の尊厳と自立



③ 権利擁護



④ 多様な生活者の理解



⑤ 生活者を取り巻く環境

1年前期
(2022生)



- 1 生活と社会のかかわりにおける、自助・互助・共助・公助について理解している。
- 2 支援が必要な人の生活の場や家族形態・社会との関わりなどそれまでの暮らしについて理解することができる
- 3 地域にある在宅・施設など生活の場の多様性を理解し利用者と結びつけることができる。
- 4 生活者を取りまく環境を把握し、その人に適した資源と結びつけ支援につなげることができる。

⑥ 社会のしくみと法制度

1年前期
(2022生)



- 1 社会保障制度の基本的な考え方としくみや内容について理解している。
- 2 高齢者福祉制度・介護保険制度・障害者福祉制度・権利擁護や個人情報保護などの基本的な考え方、各制度のしくみや内容について理解している。
- 3 地域共生社会や地域包括ケアシステムの基本的な考え方及び地域包括ケアにおける介護福祉士の役割について理解している。
- 4 制度やサービスなどの社会資源を活用し、対象者を支援できる。

⑦ 認知症の理解

1年前期
(2022生)



- 1 認知症の人の心理や身体機能に関する基本的な知識を理解している。
- 2 認知症のある人や障害のある人の家族に生じやすい課題を把握することができる。
- 3 対象者の持てる力を把握し、自立支援のための環境整備の方法を検討することができる。
- 4 援助が必要な人やその家族の自立支援に向けた支援ができる。

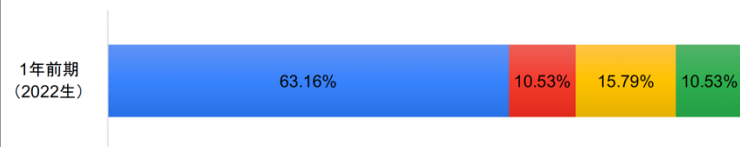
⑧-1 生活支援技術(移動)

1年前期
(2022生)



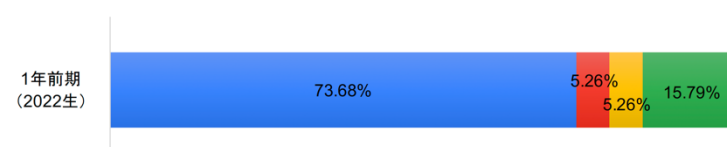
- 1 移動の意義や介助の際の留意点を理解している
- 2 対象者の能力を活用・発揮した、移動支援を指導のもとに実践できる
- 3 移動に関する、心身の構造と機能について理解している
- 4 移動支援に関して、対象となる人の日常生活や社会生活を支援することができる

⑧-2 生活支援技術(食事)



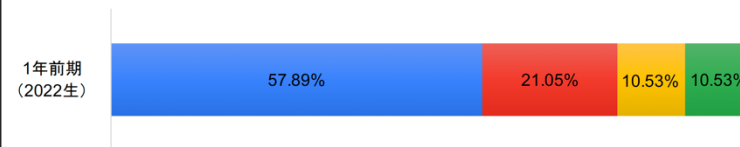
- 1 食事介助の手順について、根拠を含めて理解している
- 2 対象者の能力を活用・発揮した、食事の支援を指導のもとに実施できる
- 3 食事に関する、心身の構造と機能について理解している
- 4 食事に関して、対象となる人の日常生活や社会生活を支援することができる

⑧-3 生活支援技術(排泄)



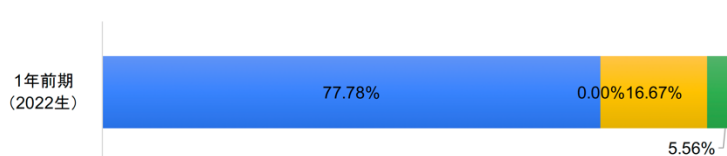
- 1 排泄への支援が、介護福祉士の重要な業務であることを理解している
- 2 排泄の意義や介助の際の留意点を理解している
- 3 対象者の能力を活用・発揮した、排泄の支援を指導のもとに実践できる
- 4 排泄に関して、対象となる人の日常生活や社会生活を支援できる

⑧-4 生活支援技術(清潔と入浴)



- 1 入浴や清潔への支援が、介護福祉士の重要な業務であることを理解している
- 2 入浴・清潔の保持の意義や介助の際の留意点を理解している
- 3 対象者の能力を活用・発揮した、入浴・清潔保持の支援を指導のもとに実践できる
- 4 入浴・清潔に関し、対象となる人の日常生活や社会生活を支援できる

⑨ 医療的ケア



- 1 感染症対策の一環として、手洗いなど、清潔の保持について実践できる
- 2 根拠に基づく喀痰吸引の方法・留意点について理解している
- 3 根拠に基づく経管栄養の方法・留意点について理解している
- 4 喀痰吸引等について、定められた方式に基づいて確実に実施できる

⑩発達と老化の理解

1年前期
(2022生)



- 1 老化に伴う身体的・心理的・社会的な変化について理解している。
- 2 障害による心身への影響や心理的な変化について理解している。
- 3 障害や慢性疾患や難病のある人の状態像や生活状況を踏まえ、本人主体の支援やQOLを高める支援を指導のもとに実践できる。
- 4 障害や認知症、慢性疾患などのある人を支援できる。

⑪コミュニケーション

1年前期
(2022生)



- 1 心理学的支援を踏まえたコミュニケーションの意義や機能を理解している。
- 2 本人の意思決定を支援するために必要なコミュニケーション技術を活用できる。
- 3 障害の特性に応じたコミュニケーションの方法を適用し、実践できる。
- 4 意思表示や意思決定を促す支援ができる

⑫介護過程の展開

1年前期
(2022生)



- 1 介護実践における介護プロセスの重要性が理解できる
- 2 ICFシートを活用して情報(観察・確認)の整理をし、生活課題を抽出できる
- 3 介護過程を踏まえ、根拠に基づいた介護計画を立案できる。
- 4 多職種と協働しながら介護過程を展開できる

⑬チームケア

1年前期
(2022生)



- 1 チームで働くために必要なリーダー、フォロワーの役割を理解している。
- 2 チームで支援することの意義や方法が説明できる。
- 3 支援が必要な人の生活を地域で支えるためのサポート体制や、多職種連携・協働による支援の基礎的な知識を理解している。
- 4 チームの一員としての役割を自覚し、協働することができる。